

【黒塚 あらすじ】

むかしむかしのことです。旅の山伏・祐慶の一行が、陸奥の安達原にたどりついた時、あたりが暗くなって

きてしまいます。そこで一行はおばあさんが暮らすあばら家に行き、泊めてもらえるようお願いをします。

おばあさんは最初断りますが、祐慶たちの頼みに「火だけがもてなしです。それだけでよろしければ」と

応じるのです。おばあさんの家で杵杵輪という糸まき車を見つけた祐慶は、その珍しさからおばあさんに、

どのように使うのかを聞き、見せてもらいます。おばあさんは自分のつらい身の上を語ったり、歌ったり

しながら、その糸まき車を使ってみせるのでした。夜が更けるほど寒くなってきました。おばあさんは祐慶たち

が暖をとれるよう、薪をとりに山へむかいます。その時おばあさんは「私の寝室は決してのぞかないように」

と怖い顔で念をおしていきます。おばあさんが出て行ったあと、そのことばが気になった祐慶のお供の

能力は、好奇心からどうしても見たくなり、祐慶たちが眠ってしまうと、こっそりとおばあさんの寝室を

のぞいてしまいます。するとそこには死体の山が！

そのことを聞いた祐慶は、そこが鬼女の住処だとさとり、急いで逃げ出します。しかし山から戻ったおばあ

さんは、秘密を見られたことを知り、怒り狂い、鬼女へと変わり追ってきます。追いついた鬼女は一行に

襲いかかります。祐慶らは必死に呪文をとなえ、祈り、戦います。そのすえに、鬼女の力は弱まり、ついには

自分の正体を恥じながら、消えてゆくのでした。

このおばあさんは、なぜ人食い鬼になってしまったのか。

これには安達原(現在の福島県)に実際に残る「黒塚伝説」という悲しい言い伝えがあります。

知っていますか？～10月1日は「国際音楽の日」です～

1977年にユネスコの要請で設立された国際音楽評議会という会議で、翌年の1978年

年から毎年10月1日を、世界の人々が音楽を通じてお互いに仲良くなり交流を深め

ていくために「国際音楽の日」とすることとしました。

日本では、1994年から毎年10月1日を「国際音楽の日」と定めています。

令和4年度

文化芸術による子供育成推進事業

— 巡回公演事業 —

のう 能 「黒塚」



ほうしょうりゅう ほうしょうかい
宝生流 宝生会

文化芸術による子供育成推進事業 — 巡回公演事業 —

小学校・中学校等において一流の文化芸術団体による巡回公演を行い、優れた舞台芸術を鑑賞する機会を提供することにより、次代の文化の担い手となる子どもたちの発想力やコミュニケーション能力の育成を図り、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力の向上につなげることを目的とした事業です。

公演の実施に当たっては、事前に公演に関するワークショップを行い、児童・生徒を演に参加させるとともに、実演指導又は鑑賞指導を行います。

○能楽について

能と狂言を合わせて「能楽」と称し、「狂言」は楽しく庶民的なセリフ劇であるのに対して、「能」は謡と舞が中心の歌舞劇です。その歴史は古く室町時代から600年以上伝承されています。2008年にユネスコの世界文化遺産に登録された日本が世界に誇る芸能です。



○舞台について

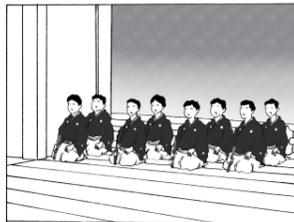
「能」は昔、お城や神社などの野外で演じられていました。そのなごりで、現在でも能楽堂（能楽専用の劇場）の舞台には屋根がついています。

舞台は三間（一間は約1.8メートル）四方の正方形でできた本舞台と、むかって左側にのびる橋がかりと呼ばれる通路でできており、演者が登場する幕を揚幕といいます。舞台の右奥にある引き戸を切戸口といいます。また、舞台正面には大きな松の絵が描かれており、その板を鏡板と呼びます。

○能役者の役わりについて

能は、四つの役で成り立っています。

- シテ方－主役を演じる人のことです。前半の主役を前シテ、後半の主役を後シテと言います。「黒塚」では、おばあさんの役が前シテ、鬼女の役が後シテです。また「地謡」という能のコーラス隊や、「後見」という舞台後方で演技や進行を助ける役もシテ方の人達がつとめます。
- ワキ方－シテが主に人ではない役（鬼や亡霊）であるのに対して、男性の人間の役で、お客さんの目線で見えます。「黒塚」では山伏・祐慶と、お供の山伏です。
- 狂言方－狂言を演じる役者で能にも登場します。「黒塚」では、山伏・祐慶たちの旅の手伝いをするお調子者の能力です。
- 囃子方－能の音楽を担当します。楽器は笛、小鼓、大鼓、太鼓です。



プログラム

【第一部】

1. 狂言「柿山伏」

2. 囃子方実演

3. 能の役割説明

—休憩(10分)— ※展示コーナーを見学

【第二部】

4. 「黒塚」のあらすじ紹介

5. 能「黒塚」

6. アフタートークと質疑応答

- 本舞台・・・四本の大きな柱に囲まれたほぼ真四角な部分。
- 目付柱・・・能の多くは面をつけるので、舞台が見えにくくなります。そのためこの柱を目にするし、ま印にして舞います。
- シテ柱・・・シテ（主役）がこの柱の近くの場所で演技を行うため。
- ワキ柱・・・ワキ（脇役）のいる場所に接しているのだからこう呼ばれる。
- 笛柱・・・笛を吹く人の坐っているところに近いのでこのように呼ばれる。
- 切戸口・・・地謡や後見が出入りするところ。
- 鏡板・・・正面奥の板。大きい老松の絵が描かれている。
- 橋がかり・・・本舞台の左側に伸びる廊下。舞台への移動だけでなく演技も行われます。
- 揚幕・・・演者が出入りする所。
- 一ノ松・二ノ松・三ノ松・・・舞台に近い方から一ノ松・二ノ松・三ノ松という。これらの松は、橋がかりでの演技の目安となります。